

■ポイント

この寝取られ小説は、上司に弱みを握られた夫のことを助けるために、夫の目の前で上司に抱かれ続けて身も心も寝取られて奪われていく夫一途の人妻の姿を描いています。

夫のことを心から愛している人妻が、夫の上司に徐々に塗り替えられて、心まで変えられていく様子を長編で描いています。

■あらすじ

板倉豊と板倉日菜子は、結婚して3年目のまだ20代の幸せな夫婦。

夫である板倉豊は、雑貨を扱う小売店の店長として勤務している。

妻の板倉日菜子は、豊が勤めている会社で、パートとして勤務している。

豊が店長を務めている小売店に配属されていて、仕事でも家庭でも豊のことを支える存在になっていた。

周りのスタッフから羨ましがられるほど仲良く、相思相愛の幸せな夫婦。

そんな幸せな夫婦の日常は、1人の上司の存在によって浸食され、塗り替えられていく。

その上司の名は、岡田修平といい、30代前半とまだ若く出世頭のやり手の男。

異常なまでの独占欲と僻み癖のある歪んだ性格の持ち主だった。

岡田修平は、結婚前から板倉日菜子のことを気に入り、好意を持っていた。

しかし、思いは敵わず板倉日菜子は、同じ会社に勤める板倉豊のことを選んだ。

歪んだ独占欲と僻み癖、そして奥に隠された性欲が、2人の幸せな未来と日常を壊していく。

岡田修平の策略により、板倉豊は弱みを握られてしまう。

追い込まれた板倉豊に、岡田修平は豊の妻である板倉日菜子を一晩貸せと交渉してきた。
激昂して提示された条件を受け入れない板倉豊。

しかし、妻の板倉日菜子は、愛する夫のことを救うため、夫の上司である岡田修平の条件を受け入れる覚悟を決める。

夫の上司により、相思相愛で幸せな夫婦の日常と絆が、少しずつ浸食され奪われていく。

独占欲と嫉妬心が強い歪んだ男の一方的な感情と性欲により、夫一筋だった人妻の心と体
は塗り替えられ寝取られていく。

背徳感、焦燥感、ストーリー性を重視する方におすすめの内容に仕上げました。

※ストーリーと背徳感を強めて寝取られ感を出すことを重視して執筆したため、寝取られ
に入るまでの過程を長くしています。

サクサクっと短編の寝取られ小説を楽しみたい方よりも、ストーリー性と背徳感重視の長
編寝取られ小説を楽しみたい方向けの作品です。

主要登場人物

板倉豊（板倉豊の夫 小売店の店長 27歳）

板倉日菜子（板倉豊の妻 小売店パート 25歳）

岡田修平（板倉豊の上司 31歳）

目次

- 第1話 『上司の策略』
- 第2話 『夫の上司に奪われた人妻の唇』
- 第3話 『絶望の始まり』
- 第4話 『汚される人妻の体』
- 第5話 『体と心の変化』
- 第6話 『交わり続ける体』
- 第7話 『人妻の最後の選択』

第1話『上司の策略』

板倉豊と板倉日菜子は、結婚3年目の相思相愛の幸せな夫婦。

まだお互い20代と若く、マイホーム購入に向けて、現在はアパートで暮らしている。

夫である豊は、雑貨などを取り扱っている小売店の店長として勤務していた。

年中無休の店のため、店長として長時間勤務を余儀なくされながらも、充実した日々を過ごしている。

最愛の妻である板倉日菜子の存在が、豊の忙しく心休まることがない日々を明るく照らしてくれていた。

豊は、身長170cmの細身体系。

学生時代は、スポーツ系の部活動には所属していなかったため、頼りない体型をしている。

どこにでもいそうな外見をしていて、特徴といった特徴がないタイプである。

他人のことを思いやることができる優しい性格の持ち主で、店の従業員からの人望は厚い。

気が弱く、遠慮がちな性格のため、頼りない男性と勘違いされることが多く損をしやすいタイプ。

しかし、仕事に対しての責任感が誰よりも強く真面目な性格をしている。

妻の日菜子は、現在25歳とまだ若く、外見は20歳前後に見られるくらい幼い。

身長は155cmと平均よりも少し身長が低く、顔は実年齢よりも幼く見えるほどの童顔。

一重だが、パッチリとした大きな瞳をしている。

細すぎず、ぽっちゃり体系というわけでもない、どこにでもいそうな体型をしていた。

胸はEカップもあり、幼い外見とは違い、男性の視線を集めるようなバストをしている。

可愛らしいルックスと男の視線を集めるような体系をしているため、男性から言い寄られることも多い。

学生時代は、日菜子のことを見るために、わざわざ他校から学校まで直接見に来る男子生徒がいるほどモテた。

社会人になってからも、日菜子のことを狙って口説く男性は後を絶たない。

すれ違いにナンパされたり、店にやってくるお客に口説かれたりすることも珍しくなかった。

そして、それは豊と結婚して人妻となった今でも続いている。

結婚して3年が経過しても、夫である豊に対する気持ちは何も変わっていない。

日菜子は、心から夫である豊のことを愛している。

どんなに外見が優れている男性に口説かれても、日菜子の心が揺さぶられることはない。

自分の心は、常に豊と共にある。

自分の心が豊から離れることは、絶対にあり得ない。

そして、それは夫である豊もわかっている。

自分が妻である日菜子に心から愛されていることを誰よりも理解していた。

豊は、いつまでもこの幸せが続くと信じている。

まさか、最愛の妻である日菜子が、自分の元から去っていく未来が待っていることなど知らずに．．．．．

まずは、この2人の出会いと現在に至るまでの経緯について説明していこう。

そして、豊かにとって、最愛の妻である日菜子を、失うことになる絶望的な未来

その全ての始まりのキッカケを、少しずつ紐解いていく・・・・・・・・・・

豊と日菜子との出会いは、今働いている店での出会いがキッカケだった。

豊がまだ店長ではなく、スタッフという立場の時に日菜子が、アルバイトとして入社してきた。

正社員として働いていた豊は、日菜子の教育係に任された。

人見知りで、コミュニケーション能力が高くない豊は、日菜子の教育係を任された当初は憂鬱で仕方なかった。

しかし、明るく社交的で、自分のことを頼ってくる日菜子に対して豊は少しずつ心を許していく。

教育係を任されて半年も経過すると、豊は日菜子のことを女性として意識するようになっていた。

そして、日菜子も同じように豊のことを男性として意識していく。

2人は、お互いのことを異性として意識しながら、自分の気持ちを伝えることができないまま時間が過ぎた。

そんなある日、2人の関係を決定的に変えるトラブルが発生する。

日菜子が接客したお客が購入した商品が、不良品だったため、怒ったお客が店に怒鳴り込んできた。

周りのスタッフやお客の視線を一斉に集めるほど大きな声に怯える日菜子。

クレマー気質なお客で、一方的に日菜子に対して大きな声で罵倒を浴びせ続けていた。

周りのスタッフやお客は、何もできずに日菜子のことを見ている。

「・・・本当に申し訳ありません。」

泣きそうになりながら、ひたすらお客に謝罪する日菜子。

誰も日菜子のを助けようとしなない状況が続いた。

そんな状況で、騒ぎに気付いた豊は、すぐに2人の間に入り、日菜子の盾になる様に怒り狂うお客を対応した。

豊は器用なタイプではなく、接客も上手くはない。

しかし、日菜子のを守るために、必死にお客に頭を下げて怒りを抑えようとする豊。

結局、お客は豊に怒りをぶつけ、暴言を吐きながら店を出ていった。

心配そうな表情と、気まずそうな表情をする日菜子。

自分から言葉をかけることができない。

「大丈夫だった？あのお客さんに言われたことは何も気にしないでいいからね。日菜子さんは何も悪くないから。」

そんな日菜子に、豊は優しく微笑み、勇気づける言葉を投げかけた。

豊の思いやりのある優しい言葉と笑顔に日菜子は心を大きく揺れた。

この瞬間から、日菜子の中で豊は、職場の先輩から恋愛対象の男性に変わった。

豊は明らかに頼りがいのある男性というタイプではない。

気が弱く、要領も悪く、外見も弱弱しくパツとしない、典型的な草食系男子。

しかし、豊は他人のことを思いやる気持ちや仕事に対しての責任感は誰よりも強い。

そんな誠実な性格と、自分のことを躊躇なく守ってくれた正義感の強さに日菜子の女心は動かされた。

「ありがとうございます。怖かったあ・・・」

日菜子は、極度の恐怖と緊張から解放され、急に泣き出した。

「え？・・大丈夫？泣かないで。ちょっと落ち着くまで休憩してきなよ。」

豊は、急に泣き出した日菜子のことを見て焦っている。

優しい性格の豊らしいリアクションだった。

日菜子は、泣いている自分を見て慌てている豊のことを見て、泣きながらもクスッと笑った。

その日から、日菜子と豊の関係は、急激に変化していく。

日菜子の教育係にされていたこともあり、豊と日菜子はシフトが被ることが多い。

ある日、仕事終わりに豊のことをカラオケに誘う日菜子。

突然の日菜子からの誘いに、シャイな性格の豊は、わかりやすく動揺していた。

女性から誘われること自体、人生の中で初めての経験だった豊は、どう対応すればいいのかわからない。

年下で女性の日菜子に誘われるがまま、流されるように一緒にカラオケに行く豊。

仕事中とは違う、子供のような笑顔を見せる日菜子を見て豊はドキッとしてしまう。

同じ職場で、教育係を任されていた立場ということもあり、豊は日菜子のことを女性として見ないようにしていた。

自分の中に込み上げてくる感情が、どのような感情なのか、豊はすぐに気付いてしまう。

カラオケを熱唱する日菜子のことを見ながら、豊は自分の気持ちに戸惑っている。

「板倉さんも歌ってください！先輩の歌声聞きたいです。」

戸惑いを隠せない豊に、日菜子は笑顔を見せながらマイクを渡した。

数年ぶりにカラオケに来た豊は、何を歌おうか迷っている。

そんな豊を見かねた日菜子は、勝手に選曲をしてしまう。

「えー・・・俺こんなの歌ったことないよ～」

日菜子が勝手に選曲した曲は、いかにも女性が好きそうな恋愛系の曲だった。

緊張しながらマイクを持つ豊。

そんな豊のことを、日菜子は一重の大きなパッチリとした目で、逸らさずに見ている。

曲が流れ、豊が緊張した表情で歌いだしても、日菜子は目を逸らさない。

お世辞にも上手いとは言えない豊の唄声を聞きながら、日菜子は目を大きく見開き感動して涙を流していた。

しかし、歌うことに必死になっている豊は、自分のことを見て涙が流している日菜子に気付かない。

なんとか歌い切り安心したような表情を浮かべる豊。

マイクを日菜子に渡そうと席を立ちあがった時によく日菜子が涙を流していることに気付く豊。

「どうしたのっ？！体調悪いの？」

鈍い性格の豊は、日菜子が涙を流している理由がわからず焦っている。

日菜子の近くに駆け寄り、心配そうな表情を浮かべていた。

「ごめんなさい。感動してるだけです。体調は悪くないです。」

日菜子は、そう言うと甘えるような目で豊のことを見つめた。

「日菜子さん？いつもと様子が変だよ？」

鈍い豊は、まだ日菜子の気持ちに気付いていない。

「・・・大丈夫です。すいません。歌いましょうっ！」

日菜子は、涙を拭うと誤魔化す様に歌いだした。

そのまま、2人は3時間もの間、カラオケを楽しむと店を出た。

「ちょっと一緒に歩きませんか？」

日菜子は、少し照れるように豊かに話しかけた。

「え？ああ・・・別にいいけど。」

帰る気でいた豊は、いつもと様子が違う日菜子のことを気にかけていた。

仕事で何かあったのか？

何か悩みでもあるのか？

豊は日菜子が自分に何か話そうとしていることには気付いている。

しばらく、無言のまま2人は目的地も決めずに歩いていた。

「・・・ちょっとあそこの公園に寄ってもいいですか？」

通り道にあった公園のベンチに座る豊と日菜子。

日菜子は、緊張していつもよりも表情が硬い。

「・・・あのさ、やっぱり何かあったんでしょ？日菜子さん、いつものと様子が違うよ。俺で良かったら相談に乗るけど・・・」

沈黙を破る様に口を開く豊。

明らかにいつもの様子が違う日菜子のことが心配になっていた。

「・・・相談ではないんですけど、大事な話があります。」

日菜子は、普段よりも小さな声になり緊張していた。

「大事な話？どうしたの？」

豊は、まだ空気を読むことができず日菜子のことを心配している。

「・・・私、板倉先輩のことが好きです。付き合ってください。」

顔を赤くしながら自分の思いを豊かに伝える日菜子。

一瞬、豊は自分の耳を疑った。

しかし、日菜子の表情を見て本気であることにすぐに気付く豊。

一呼吸すると、自分の正直な思いを言葉にするために口を開いた。

「俺も日菜子さんのことが好きだったんだ。俺なんかでよければ、これからも、よろしくね。」

素直な性格の豊は、気取らずに素直に自分の気持ちを日菜子に伝えた。

「えっ！？いいんですか？やったぁ・・・絶対振られると思ってたぁ・・・」

日菜子は、豊の言葉を聞くと、喜びながら泣き出した。

「喜ぶのか、泣くのかどっちかにしなよ。でも、日菜子さんが喜んでくれて嬉しいよ。」

豊は、いつものように優しい笑顔を見せた。

こうして、2人の交際はスタートした。

豊と日菜子が交際を始めたことは、すぐに店の全スタッフに広まった。

店舗の従業員は、付き合うことになった2人のことを心から祝福してくれた。

社内恋愛が禁止という規定もなく、何も抵抗なく2人のことを受け入れスタッフ。

職場には笑顔が溢れ、全員が笑顔で2人のことを応援してくれた。

ただ、1人の男を除いては・ ・ ・ ・ ・

そして、この男の存在により、豊と日菜子の幸せな生活と日常は狂わされていく。

そのことを、まだこの時は誰も知らない・ ・ ・ ・ ・

それから、早くも2年の月日が流れた。

豊と日菜子は、喧嘩をすることもなく順調に交際を続けている。

周りの従業員は、すでに2人のことを夫婦のように扱い接していた。

そんなある日、豊は店長である男に呼ばれた。

「悪いな。急に呼び出して。」

その店長の男は、足を組みながら、いつものように偉そうな態度で豊かに話しかけた。

「いえ、大丈夫です。それで、話とはなんですか？」

苦手な店長の男に怯えながら質問する豊。

偉そうな態度と高圧的な雰囲気常を常に発している店長が、豊は苦手だった。

「実は、急で悪いが、俺は来月からエリアマネージャーに昇格することになったんだ。」

偉そうに自分の出世を語りだす店長の男。

足を組んだまま、豊のことを見下す様に見える。

「そうなんですか？おめでとうございます。」

豊は、社交辞令のように目の前の男の出世を喜ぶ振りをした。

本当は、まったく興味もなく嬉しくもない。

「ありがとう。それで、新しいこの店の店長なんだが、板倉に任せることにする。俺が上に推薦しておいた。」

店長は、恩着せがましく、偉そうに言い放った。

しかし、その言葉に豊の表情は一気に変化する。

「えっ！？俺が新しい店長ですか？」

思わず大きな声で聞き返す豊。

信じられないといった表情をしていた。

「ああ。お前は入社してから、ずっとこの店で働いてるからな。適任だと思ってね。」

店長の男は、面倒そうに答えた。

明らかに、豊のことを邪険にしている。

豊のことを店長に推薦したのも、豊が自分に従順で逆らうことがないとわかっていたことが理由であった。

都合よく使えて、自分に逆らうことがない豊は、この男にとって都合の良い存在でしかない。

そして、豊のことを店長に推薦した理由は、実はもう 1 つあった。

この理由こそが、豊のことを店長に推薦した一番の理由であることに、まだ本人は気付いていない。

「ありがとうございます店長！ご期待に応えられるように精いっぱい頑張ります。」

自分が店長に指名された本当の理由と目の前に座っている男の狙いに気付いていない豊。

自分が店長にすることを、何も考えずに素直に喜んでいた。

そんな豊のことを見て、目の前の男は薄ら笑みを浮かべている。

その男の名は、岡田修平。

日菜子や豊が勤める店舗の店長を務めている男であり、この時は20代後半と若い。

身長は180cm、スラっとした体格に、適度に鍛えられた筋肉質の体。

俳優にいても、違和感を感じさせないように整った顔立ち。

コミュニケーション能力と人心掌握術に長けており、今までいくつもの不採算店を黒字回復させて立て直した実績がある優秀な男。

その功績が認められ、まだ20代後半という若さで、エリアマネージャーに抜擢された。

日菜子のことを採用したのも、現店長である岡田修平だった。

数字に厳しく、豊だけでなく他の従業員にも厳しい態度や言動を取ることも珍しくない。

豊は、この岡田修平のことが苦手で嫌いだった。

実績ばかりを重視し、従業員のことを考えない行動や言動を豊は受け入れることができていない。

正義感と他人に対しての思いやりが強い豊と岡田修平は、まさに正反対のような属性の人間だった。

店長だが、毎日店舗にいるわけではない。

この時、すでに岡田修平は、豊達がいる店舗だけでなく、他にも店舗の店長を兼任していた。

しかし、岡田修平は定期的に豊達の店舗を訪れては、改善事項や従業員への指摘をしていく。

そのため、従業員は岡田修平が店に来ると、表情が強張るほど緊張している。

岡田修平は、恐怖政治が得意で、従業員を自分に従わせるスタイルを最も得意としていた。

「期待しているよ。明日から、店長業務の引継ぎをしていくから、そのつもりで準備だけはしておけよ。」

岡田修平は、偉そうな態度で豊かに指示をしている。

「はい。わかりました。よろしくお願いします。」

豊は、店長に昇格できるという嬉しさに心が躍っていた。

岡田修平の本当の狙いに気付くこともなく・・・・・・・・

売場に戻った豊は、いつも以上に一生懸命仕事をこなしていく。

そんな豊を見て、周りのスタッフは驚いていた。

「ねー豊どうしたの？何かいいことでもあったの？」

日菜子が嬉しそうにしている豊に質問する。

「うん。まあちょっとね。詳しいことは後で話すよ。」

豊は、嬉しそうに笑顔を見せながら、意味深な言い方をして日菜子に伝えた。

「何それ。めっちゃ気になるんだけど。楽しみにしている。」

なぜか日菜子も嬉しそうな表情を見せている。

「も一新婚夫婦みたいにイチャイチャするのは家だけにしてよ。」

2人の微笑ましい姿を見て、他の従業員は豊と日菜子のことを揶揄った。

従業員同士の仲も良く、2人の関係も全員が祝福して受け入れてくれている。

今この瞬間は、豊の人生にとって幸せの絶頂の瞬間だった。

岡田修平という存在がいなければ・ ・ ・ ・ ・

「お喋りしないで、暇なら店の掃除をしようか」

スタッフ同士で楽しく話してる時、バックルームから店内に岡田修平が出てきた。

店内の空気は、岡田修平の登場により、一瞬にして変化していく。

先ほどまでの温かい雰囲気は一瞬にして消え失せていた。

従業員の表情は硬くなり、岡田修平に怒られないように各々が自分の作業に没頭していく。

それは、豊や日菜子も例外ではなかった。

「日菜子さんには、俺と商品と陳列と売場づくりを手伝ってほしいんだけど、いいかな？」

岡田修平は、笑顔を見せながら日菜子に話しかけた。

他のスタッフや豊と接する時とは、まったく別人のような態度だった。

これは、今に始まったことではない。

日菜子がこの店で働き始めた時から、ずっと岡田修平は日菜子のことだけは特別扱いをしている。

他のスタッフには怒鳴り散らすようなミスをしても、日菜子なら笑って済ませていた。

そして、何か作業をする時には、必ず日菜子に声をかけて手伝わせている。

一部の従業員の間では、岡田修平は日菜子のことを狙っているのではないかと？

そんな噂話が広がるほどであった。

「じゃあ、この商品をこっちの売場に陳列して・・・・・・・・」

岡田修平は、他の従業員には見せないような笑顔と優しい口調で日菜子に指示を出していく。

その様子を、豊は心配そうな表情を浮かべながら見つめている。

岡田修平が、以前から日菜子のことを特別扱いしていることは、豊も当然知っていた。

しかし、この店舗の絶対的な支配者であり、上司である岡田修平には何も意見することができない。

豊は、岡田修平には店長として全スタッフに平等に接してほしいと願っていた。

自分は、岡田修平のようには絶対にならない。

日菜子のことだけを、あからさまに特別扱いする岡田修平のことを見て、豊はそう心に決めていた。

「いいよ重たいでしょ。それ俺が持つから。日菜子さんは、こっちの売場作って。」

岡田修平は、重い商品や商品の陳列棚を持とうとしている日菜子に声をかけた。

少しでも、日菜子にいい所でも見せようとしているか、岡田修平は普段は絶対にやらないような作業を率先して取り組んでいる。

周りの従業員は、岡田修平に怯えながらも、少し冷やかな視線を送っていた。

豊は、岡田修平が日菜子に対して余計なことをしないか見張るように視線を送っている。

単純に岡田修平のことを嫌っているからというわけではない。

それには、理由があった。

日菜子から岡田修平の愚痴は、日常的に聞かされていた。

愚痴の内容の大半が、岡田修平にしつこく口説かれた、食事に誘われたなどの内容だった。

岡田修平の日菜子に対する態度や言動を見ていれば嫌でも気付いてしまう。

日菜子に対して岡田修平が好意を持っていることに・・・

岡田修平からの誘いを日菜子は、いつもハッキリと断っていた。

しかし、諦めることなく、しつこく何回でも日菜子のことを食事に誘う岡田修平。

豊は、その状況を理解しながらも、何も言えずに、ただ遠くから我慢して見ていることしかできない。

岡田修平が日菜子のことを誘ったり、口説き始めたのは、日菜子がこの店で働き始めてすぐのことだった。

しかし、岡田修平のことを生理的に受け付けない日菜子は、最初から誘いを断り続けていた。

店長という立場の岡田修平と関係が悪くならないように、岡田修平の機嫌を伺いながら上手く誘いを断る日菜子。

それでも、岡田修平の心は折れることなく日菜子のことを口説き続けている。

他の従業員も日菜子が岡田修平に口説かれていることはすぐに気付いた。

しかし、岡田修平との関係が悪化することを恐れ、誰も何も言うことができない。

日菜子の教育係を豊に指名したのは、岡田修平である。

本心では、日菜子の教育係は自分がしたいと思っていた。

しかし、店長業務や複数店舗を管理している立場の岡田修平には、時間を捻出する余裕がない。

そのため、自分にとって無害で大人しい性格の豊に白羽の矢が立った。

女性に興味がなく、地味で積極性もない豊だからこそ、岡田修平は日菜子の教育係に指名した。

他の男性スタッフを教育係に指名して、日菜子と深い関係になることを回避することが目的だった。

しかし、岡田修平の思惑と狙いは、大きく外れてしまう。

まさか、豊と日菜子が交際を開始することになるなんて岡田修平は予想もしていなかった。

2人が付き合うことになった時、店舗の授業員は豊と日菜子のことを祝福した。

しかし、岡田修平だけは豊のことを嫉妬と憎しみに満ちたような目で見ていた。

日菜子と豊が交際をスタートさせてから、明らかに岡田修平の豊への態度は悪くなっていく。

他のスタッフが嫌がるような作業を、全て豊に割り振りしてやらせていた。

無駄に残業させることも多くなり、肉体的にも精神的も豊のことを追い込んでいく。

しかし、そんな豊を精神的に支えていたのは日菜子だった。

日菜子は、岡田修平の目を盗んで仕事を手伝ったり、豊の愚痴を聞いたりして必死に豊のことを支えた。

岡田修平は、豊と日菜子が付き合うことになっても、日菜子のことを口説き続けた。

まるで、豊の存在なんて、まったく気にしていないかのように、毎日のように話しかけている。

他の従業員も、そんな岡田修平の行動に当然気付いていた。

岡田修平に見つからないように、注意喚起の意味も込めて豊に注意するように教えてくれる従業員も多い。

優しく性格の豊は、岡田修平とは違い店舗内の従業員からの信頼は厚かった。

従業員への気配りや配慮、仕事上のフォローも積極的にする豊は、店舗の従業員から好かれている。

そのため、日菜子との交際も全員が素直に応援してくれた。

そのような空気と状況が、岡田修平にとっては不快だった。

自分のことをまったく相手にしない日菜子

自分のことを嫌い陰口を言い続ける従業員

そして、日菜子の心を射止め、順調に交際を続ける豊

岡田修平にとって、今の状況は、とても受け入れがたく辛い状況であり、屈辱的な毎日を経験している。

見下して、自分に対しては無害であると決めつけていた豊が、まさか自分にとって障害物になるとは予想もしていなかった。

しかし、エリアマネージャーに昇格が決まったことが転機になり、岡田修平は動き始める。

豊から全てを奪うために。

そして、日菜子の体と心を豊から奪い取り、自分が手に入れるために・・・・・・・・

第2話『夫の上司に奪われた人妻の唇』

店長職への引継ぎ業務が始まった。

豊は、引継ぎ業務の関係により、以前よりも岡田修平と働く時間が増えた。

その分だけ、豊のストレスと精神的負担は大きくなっていく。

引継ぎ業務をしながら、通常の業務もこなしていた。

「この前、教えた分の発注は終わってるのか？」

岡田修平は、嫌味な言い方をしながら豊かに聞いた。

「・・いえ、すいません。まだ終わってません。」

まだ通常業務と店長業務を兼任するほどの実力がない豊は憔悴していた。

毎日のように岡田修平から嫌味を言われ、忙しさに追われる日々。

そんな毎日が、確実に豊の精神を蝕んでいた。

しかし、日菜子が豊の支えになり、岡田修平の嫌がらせや嫌味に耐え抜く豊。

気が付くと、店長職の引継ぎはトラブルなく終わった。

表面上は・ ・ ・ ・ ・

そして、それから1ヶ月が経過し、豊は店長に昇格して忙しい日々を送っている。

岡田修平は、エリアマネージャーに昇格して、以前よりも店舗に姿を見せる頻度が減った。

慣れない店長職に慣れようと必死に働く豊。

そんな豊を日菜子は、隣で必死に支えている。

岡田修平が店舗に姿を現さなくなったことで、店の雰囲気は以前よりも確実に明るくなった。

店で働く従業員の表情は明るく、以前よりも生き活きと働いている。

店長業務に悪戦苦闘しながらも、豊はスタッフと日菜子に支えられながら必死に頑張った。

店長を交代してから、半年後には店の売上は岡田修平が店長をしていた頃の1.5倍も増えている。

豊の努力と、店の雰囲気良くなったことにより、客数が倍増したことが要因だった。

岡田修平とは、内心では、その状況にイラついている。

エリアマネージャーとしての立場で考えるなら、店舗の数字が伸びているのは喜ばしい状況だった。

しかし、自分と交代してわずか半年という期間での話となると、岡田修平自身の店長としての手腕が問われかねない。

そのため、岡田修平は上層部にあたかも自分の指示した施策が、功を奏したと真実を捻じ曲げて報告していた。

岡田修平は、豊が店長として日々奮闘している状況でも、定期的に店舗を訪れては、日菜子のことを口説き続けている。

シフトを確認して、日菜子がいる時間に合わせて店を訪れていた。

そのことを、他のスタッフや日菜子、そして店長である豊は知っていた。

「ね一豊。また岡田さんに食事に誘われたんだけど・・・私あの人マジで無理。」

ある日、飲食店で一緒に食事をしていると、日菜子が憂鬱そうな表情で豊に愚痴を聞かせていた。

「また？これで何回目だよ・・・何回誘えば気が済むんだろうね。」

豊は、呆れたような表情で日菜子の話を聞いている。

岡田修平が日菜子のことを口説いていることは、豊は昔から知っている。

その度に、日菜子から愚痴を聞かされていた。

最初の頃は気にしていたが、もうこの頃になると当たり前のような状況になり、豊も以前のように過剰に気にすることはなくなっていた。

この時の豊は気付いていなかったが、それは完全に慢心だった。

この慢心により、最愛の女性である日菜子のことを失うことになることを、この時の豊は知らない・・・

「岡田さんって陰湿な性格してるから、嫌われたら働きづらくなるし。どうしょう・・・」

日菜子は、岡田修平に対して、どう接すればいいのか、わからなくなっていた。

そんな日菜子のことを心配する豊。

「それなら、日菜子のシフトを変えてみるか？あの人、日菜子のシフトを確認して店に来てるからさ。」

豊は、優しく微笑みながら悩んでいる日菜子に提案した。

「うーん。でも、そんなことしたら、豊が岡田さんに怒られるんじゃないの？」

日菜子は、自分のことよりも豊のことを心配している。

豊かに接する岡田修平の態度は、日菜子も前々から気にしていた。

その原因が、自分であることにも、日菜子は薄々気付いている。

「大丈夫だよ。適当に誤魔化すから。怒られたら、その時は対応策を変えよう。」

豊は、自分のことを心配する日菜子に対して前向きな言葉を投げかける。

「わかった。ありがとう豊。」

日菜子は、嬉しそうに笑いながら豊を見ている。

店長になってから豊は、以前よりも頼もしくなった。

付き合いだての頃は、頼りなく感じていたが、最近の豊は違う。

店長として従業員のことや店のことを守ろうと自分の意識を変えていた。

そんな豊のことを、日菜子は頼もしく感じ誇らしく感じている。

自分のことを最優先で考えて守ろうとしてくれる豊の優しい心が、日菜子の心をときめかせていた。

そして、その言葉通り、さっそく直近で作っていたシフト表を変更する豊。

それから数日が経過し、岡田修平は店舗にやってきた。

修正前のシフトを確認していた岡田修平は、いつも通り日菜子がいる時間を狙って店を訪れている。

「お疲れ様。あれ、今日は日菜子さんはいなのか？」

日菜子が出勤していないことに気付いた岡田修平は、不機嫌そうに豊かに質問した。

「お疲れ様です。報告が遅れて申し訳ありません。急遽、シフトを変更しました。」

豊は、気まずそうにしながら岡田修平に報告した。

従業員の時から、岡田修平に散々嫌味を言われ続けてきた豊の体と心には、岡田修平に対しての恐怖心が刻み込まれている。

豊の全身から嫌な汗が滲み出ている。

「はぁ？お前なんで俺に報告しないの？報告なんて基本中の基本でしょ。お前店長失格だよ。」

岡田修平は、わかりやすく不機嫌になり豊のことを罵倒した。

「・・・申し訳ありません。今後は、注意します。」

豊は頭を下げて岡田修平に謝罪した。

今まで、散々怒鳴り散らされたことで、豊の精神は完全に岡田修平に対して屈服していた。

逆らうという、ただ一方的に岡田修平の機嫌を伺い従うことしか、豊の心と体には選択肢はない。

「なんだよ。せっかく日菜子さんに会えると思って楽しみにしてきたのによ。」

豊がいることなんて気にする素振りを見せない岡田修平。

感情のまま、豊のことを罵倒すると、店内をチェックしていく。

豊が店長に交代してから、店の売上も利益も上がっているため、数字のことについては岡田修平は一切に触れようとしない。

岡田修平が店内を歩いているだけで、他の従業員は委縮して表情が硬くなっている。

店の雰囲気は悪くなり、その影響を受けるかのようにお客は店から出ていった。

店舗を統括するエリアマネージャーとしては、あるまじき行為だが、誰も岡田修平には注意も指摘もできない。

岡田修平は、店舗全体を確認すると、豊のことを煽る様に指摘事項を口頭で伝えていく。

豊は、焦りながら言われたことをメモしていた。

「わかったな？今伝えたことを、俺が次に来るまでに改善しておけ。それと、今出てるシフトを変更するなら、すぐに俺に連絡しろ。」

不機嫌そうに言うと、岡田修平は帰っていった。

「はぁ・・・なんだよあの人・・・結局、日菜子に会いたかっただけだろ。」

岡田修平が居なくなった後、極度の緊張から解放された豊は、ボソッと1人で呟いた。

勝手にシフト変更をすることができなくなったことで、日菜子のことを守る手段を失う豊。

それから、岡田修平は日菜子がいる時間帯を狙って店舗にやってくる。

その度に、日菜子に話しかけたり、デートに誘うようなことを続けていた。

日菜子に対しての岡田修平の行動が、あまりにも目に余るということで、他の従業員から豊の元にクレームがくるほどであった。

岡田修平は、日菜子に何度断られても、諦めないで口説き続ける。

日菜子も誘われる度に断り、気まずい気持ちになっていた。

具体的に対策をできないまま、豊はただ見ていることしかできない。

店長を任された責任感と忙しさに追われる日々に、時間だけはすぐに過ぎていく。

その間にも、岡田修平による日菜子へのアプローチは続いていた。

表面上では、3人の関係は何も変わることなく1年が経過していく。

そして、豊と日菜子は結婚した。

豊のプロポーズを、日菜子は涙を流しながら喜んで受け入れた。

2人の結婚を、店舗の全従業員が祝福している。

岡田修平を除いて・・・・・・・・

2人が結婚すると知った時、岡田修平の表情は一気に歪んだ。

祝福することもなく、ただ不機嫌になり、周りの従業員に当たり散らす岡田修平。

エリアマネージャーとしての権力を振りかざし、豊に毎日のように嫌がらせをしてきた。

しかし、豊は岡田修平の嫌がらせにも負けないで必死に耐えている。

店長として店舗の数字を伸ばし、確実に実績を積み上げていく豊。

日菜子のことを幸せにする。

それだけが、豊の原動力になっていた。

店長として悪戦苦闘しながら店舗の売上を伸ばし続ける豊。

日菜子との新婚生活に幸せを感じながら、毎日を必死に生きていた。

そして、気が付くと、店長を任されるようになってから、早くも3年が経過していく。

3年も経つと、豊は店長職にも慣れて以前よりも成長して店長としての風格が出ていた。

担当のエリアマネージャーは、岡田修平で変わっていない。

結婚して3年が経過した今でも、岡田修平は日菜子のことを口説き続けていた。

夫である豊のことを、まったく気にすることなく日菜子を狙い続ける岡田修平。

そして、その岡田修平に対して何も注意することができない豊。

2人の関係だけは、3年前から何も変わっていない。

そんなある日、月に1回ある店舗ミーティングのために岡田修平が店舗にやってきた。

いつものように、店舗の改善事項を淡々と話す岡田修平。

従業員の表情は、いつもよりも堅く、空気も通常と比較にならないほど重い。

岡田修平が店舗に来るだけで、雰囲気は悪くなる。

内心では、誰も岡田修平の人間性は認めていなかった。

「指摘事項は、これで終わりです。急ですが、今週の週末に飲み会を開催します。忙しいとは思いますが、全員参加をお願いします。」

岡田修平の最後の連絡に、全員の気分が落ち込んだ。

店舗の従業員同士では、定期的に飲み会は行われている。

しかし、普段はこの飲み会に岡田修平が参加することはない。

従業員が嫌がることを知っている豊は、あえて岡田修平のことを呼ばずに内緒にして開催していた。

岡田修平が主宰で開催される飲み会は、多くて気も年に2～3回程度。

その度に、全従業員は嫌々飲み会に参加していた。

岡田修平が主宰する飲み会に欠席することは絶対に許されない。

強制参加であることは、全員が把握していた。

ミーティングが終わり、従業員達は逃げるように岡田修平がいる控室から出ていった。

「日菜子さん、悪いけど、ちょっと手伝ってもらっていいかな？」

他の従業員と一緒に逃げようとする日菜子に声をかける岡田修平。

「・・・はい。大丈夫ですけど・・・」

日菜子は、嫌な気分になっていることを表情から隠せない。

いつものような笑顔は消えていた。

「売場を直したいから、悪いけど手伝ってよ。」

岡田修平が嫌がる日菜子を連れて控室を出ようとする。

「あの・・・俺で良かったら手伝いますよ？」

日菜子を強引に連れ出そうとする岡田修平に焦ったように声をかける豊。

岡田修平のことを止めようとしていた。

「あ？別にお前に手伝ってもらわなくても大丈夫だよ。日菜子さんがいれば十分だからよ。」

岡田修平は、雑な態度で豊のことを黙らせた。

日菜子に話しかける時とは、別人のような対応。

そんな岡田修平の態度にイラっとした日菜子は、無意識に一瞬だけ岡田修平のことを睨みつけた。

「・・・そうですか。すいません。売場直しよろしくをお願いします。」

岡田修平の高圧的な態度と言動に委縮してしまう豊。

「お前は、指示しておいた資料の作成をしてろ。」

それだけ言うと、日菜子のことを連れて売場に向かう岡田修平。

日菜子は、豊のことを心配そうに見つめながら、岡田修平と控室から出ていった。

「なんだよ・・・もっと言い方ってものがあるだろ。慣れ馴れしく日菜子に話しかけやがって。」

控室に1人残された豊は、ボソッと呟いた。

苛立つ気持ちを抑えつつ、岡田修平から命じられた資料の作成をする豊。

作業に没頭していると、すでに1時間が経過していた。

ふと、日菜子のが気になり、売場を確認するために控室から出ていく豊。

売場に出て周りを見渡すが、日菜子と岡田修平の姿が見当たらない。

「あれ？いないな・・・どこ行ったんだろ？」

2人の姿を探して売場を歩いていると、お客に捕まってしまう豊。

他のスタッフも周りにいなく、流れでそのお客のことを豊が接客をすることになった。

豊が接客対応に追われている頃、日菜子は人目のつかない店舗の裏で岡田修平に口説かれていた。

「なあ、一回だけでいいからさ、食事に付き合ってよ。豊には絶対に内緒にしておくから。」

この日の岡田修平は、いつもよりもストレートに日菜子のことを口説いていた。

仕事中であることを、忘れているのかと思わせるくらいの態度を見せている。

岡田修平の態度や言動から、豊に対しての配慮や気遣いは何も感じられない。

「・・・すいません。ご一緒することはできません。豊かにも悪いので・・・」

日菜子は、気まずそうにしながら岡田修平の誘いを断っている。

長い期間をかけて自分のことを口説いてくる岡田修平に対して、すでに嫌悪感を覚えるほど精神的に拒絶していた。

そのことに気付いていない岡田修平は、怯むことなく日菜子のことを口説き続ける。

「だからさ、豊には絶対に内緒にしておくから。バレないから大丈夫だよ。それにバレたとしても豊は優しいから怒らないだろ。」

豊のことを遠回しに馬鹿にするような言動をする岡田修平。

この言葉を聞いて、日菜子は少し感情的になってしまう。

「すいません。私は豊と結婚しているので。他の男性と2人で食事に行くことは絶対にありません。」

普段では言わないような口調で、ハッキリと岡田修平の誘いを断る日菜子。

今まで、岡田修平に対してここまで強い口調と言葉で言い返したことはなかった。

日菜子は、言葉を発した後に、冷静になり後悔した。

しかし、もうすでに遅かった。

「あっそ。じゃあいいよ。せっかく豊のことを店長に推薦してやったのによ。あいつが店長に昇格できたのは誰のおかげだと思ってるんだよ。」

岡田修平は、日菜子の態度と強い言葉に機嫌を悪くして不貞腐れている。

遠回しに、豊の出世が自分の力であることを日菜子にチラつかせていた。

「あ・・すいません。豊のことを推薦していただいたことについては、本当に感謝しています。」

日菜子は、焦ったよう態度を変えた。

豊に何か嫌がらせをするような素振りを言葉で見せる岡田修平のことを日菜子は恐れている。

日菜子の前では、ただの女好きだが、岡田修平にはもう一つの顔がある。

エリアマネージャーとしての権力と、会社の上層部から期待されている出世頭。

社内ではエース的な立ち位置にいる岡田修平に嫌われると、豊の立場が悪くなってしまう。

豊のことを考えて、日菜子は岡田修平の機嫌を取る様に態度を変えた。

本当は、豊のことを見下す岡田修平のことを心から拒絶していた。

「ふーん。本当にそう思ってるかな。まあ、いいや。今日はもう帰るわ。」

不貞腐れた態度を見せながら、岡田修平は車に乗り込み店を後にした。

「自己中人。気持ち悪い。」

日菜子は、走り去る岡田修平の車を見つめながらボソッと呟いた。

「日菜子っ！こんな所にいたんだ。岡田さんは？」

日菜子のことを探し回っていた豊が、息を切らしながら走ってきた。

「もう帰ったよ。またしつこく口説かれてた。マジ無理あんな軽い人。」

日菜子は、不機嫌そうに普段なら言わないようなキツイ言葉を言い放つ。

岡田修平に対する不快な気持ちに満ちていることがよくわかる表情をしていた。

「そっか。ごめんな止められなくて。お客さんに捕まって接客してたからさ。」

豊は、申し訳なさそうに日菜子に謝った。

そんな豊に日菜子は甘えるように抱きついた。

「・・・日菜子？どうしたの？まだ工作中だろ。」

急に自分に抱きついてきた日菜子に驚く豊。

人目のない店舗裏だが、普段の日菜子なら外で豊かに甘えるようなことは絶対にしない。

「・・・ごめん。ちょっとだけ抱きしめて。」

岡田修平から解放された安堵感と豊が助けに来てくれたことへの安心感から、日菜子の気持ちは緩んだ。

甘えるように豊に抱きついて離れようとしないう日菜子。

「・・・日菜子。」

豊は、そんな日菜子のことを強く抱きしめた。

誰もいない店舗裏で、2人はしばらくお互いの感触を確かめるように抱きしめ合っていた。

それから数日が経過した。

この日は、岡田修平が主宰の飲み会当日。

日菜子や豊だけでなく、店の従業員は全員がこの日だけは、憂鬱な気分になっていた。

いつもよりも、店の締め作業を早く行う店舗の従業員と豊。

少しでも遅ければ、岡田修平の機嫌が悪くなってしまうことを全員が理解している。

通常通りの時間まで営業して、店を閉めると、各々が予約していた居酒屋に向かった。

日菜子と合流するために一度アパートに戻る豊。

先に帰宅していた日菜子は、すでに準備を終えていた。

「お疲れ様。もう準備しちゃった。早く行かないと遅刻しちゃうよ。」

日菜子は、いつもよりも憂鬱そうな表情を浮かべていた。

従業員同士の飲み会に行く時の日菜子は、普段なら明るく楽しそうにしている。

しかし、今回は岡田修平が主宰する飲み会ということもあり、まったく気乗りしていない。

「ごめん。すぐ支度するよ。岡田さんの機嫌が悪くなると面倒だしね。」

豊もいつもよりも憂鬱そうな表情を浮かべている。

日菜子と同じく、豊も今回の飲み会には、まったく気乗りしていない。

正直に言ってしまうと、豊も日菜子も今回の飲み会には行きたくなかった。

しかし、欠席すると岡田修平からのイビリや嫌がらせが激しくなってしまう。

豊も日菜子も、岡田修平に従うしかない状況だった。

憂鬱そうな表情をしながら予約した居酒屋に向かう豊と日菜子。

居酒屋に到着すると、数人の従業員が外で待機していた。

「お疲れ。どうしたの？店の中に入らないの？」

豊が従業員の女性に話しかけた。

「お疲れ様です。店長と日菜子ちゃんが来るのを待ってました。もう岡田さんが来てるから、外に避難してました。」

従業員の女性は、気まずそうな表情をしながら笑っている。

「そっか。到着が遅くなってごめんね。じゃあ、みんなで中に入ろうか。」

従業員の気持ちを察した豊は優しく声をかけた。

店の中に入ると、従業員の言葉通り、すでに岡田修平が先に来て待機していた。

「おう。店長の到着が俺より遅いってどういうこと？もっと早く来いよお前。」

部屋に入って早々に、岡田修平は豊に対して高圧的な態度で接してきた。

「道が混んでいまして・・・お待たせして申し訳ありません。」

豊は、岡田修平の高圧的な態度に委縮してすぐに謝罪した。

「もういいよ。席はこっちで決めておいたから。座席表見て自分の席に座れよ。」

岡田修平は、事前に作っておいた座席表を豊に渡した。

渡された座席表を見て、表情を一気に変化させる豊と日菜子。

予め決められていた座席表を確認すると、日菜子は岡田修平の隣に配置されていた。

豊は、日菜子と岡田修平から微妙に話された隅っこの位置に配置されている。

まるで、邪魔者扱いでもされているかのような、悪意のある配置だった。

「うわぁ・・・最悪・・・」

渡された座席表を見て、日菜子は思わずボソッと呟いた。

豊と顔を見合わせると、指定された自分の座席に向かう日菜子。

日菜子は少し距離を取りながら、岡田修平の隣に座った。

心配そうにしながら、自分の席に座る豊。

指定された豊の席からは、日菜子と岡田修平の様子は、辛うじて確認できた。

岡田修平は、嬉しそうにしながら、さっそく馴れ馴れしく日菜子に話かけている。

わざと日菜子に体を近づけるような素振りをしながら、楽しそうにしている岡田修平。

そんな岡田修平とは対照的に、明らかに嫌がりながら岡田修平から離れようとする日菜子。

そんな2人のことを、豊はソワソワしながら、落ち着かない様子で見ている。

そうしているうちに、全員のテーブルに料理とビールが運ばれてきた。

「みんな今日は忙しい中、集まってくれてありがとう。乾杯っ！」

岡田修平が立ち上がり、適当な挨拶をすると、飲み会がスタートした。

豊は、席が近い従業員と会話しながらも、日菜子のことが気になり飲み会に集中できない。

飲み会が開始してから、30分前後が経過すると、日菜子の席から大きな笑い声が聞こえるようになった。

その声の主は、岡田修平で、周りの席の従業員は、嫌々酔い始めている岡田修平の機嫌を取る様に嫌々話を合わせている。

日菜子もその一人で、馴れ馴れしく話しかけたり、体を近づけてくる岡田修平のことを上手く避けつつ、相手をしていた。

豊は店長と言うと立場ということもあり、従業員から酒を注がれ、自然と普段よりも飲む量が増えていた。

酒に弱い豊は、普段の疲れが溜まっていたこともあり、早くも酔いが回っていく。

しかし、日菜子のことが気になり、飲み会を楽しむことができない豊。

不安そうな表情をしながら、日菜子と岡田修平のことを観察するように見ていた。

「それにしても最近店の売上が上がって調子がいいな。来客数も増えてるようだし。日菜子ちゃんのおかげだな。」

岡田修平は、楽しそうにしながら日菜子のことを褒めている。

体を必要以上に近づけ、嫌がる日菜子に一方的に話しかけていた。

「私は何もしてないですよ。豊が店長として頑張ってるからじゃないですかね。」

日菜子は、何気なく夫である豊のことを会話に出して褒めた。

実際に、岡田修平から豊に店長が代わってから店の売上は伸びている。

「違うよ。あいつは俺の指示したことをやってるだけだ。別に頑張ってるんだろ。」

少しだけ表情を変えて不機嫌になりだす岡田修平。

日菜子の口から豊の名前が出たことが原因だった。

「そんなことないですよ。豊は毎日店の従業員のこともしっかり考えて頑張ってますよ。ちゃんと見てあげてください。」

日菜子も意地になり、普段よりも強い口調で話している。

豊の努力を認めようとしない岡田修平の一方的な発言が日菜子は許せなかった。

「わかってるよ。豊のことも、しっかり評価して上に報告してやるから。そんなに怒るなよ。」

岡田修平は、日菜子の機嫌を取る様に話しかけている。

周りの席の従業員は、そんな2人の会話をヒヤヒヤしながら聞いていた。

「そんなことよりさ、豊と結婚してどうなの？もう3年も経つけど、そろそろ飽きたんじゃないの？」

岡田修平は、急に仕事から夫婦生活に話を変えた。

「はい？毎日楽しいですよ。飽きてません。」

岡田修平の質問に、日菜子の表情は変わっていく。

なぜ結婚生活のことを聞かれなくてはいけないのか理解できなかった。

「本当に？豊のあの性格だから、日菜子ちゃんも苦労してるんじゃない？頼りないし。」

さりげなく豊のことを小馬鹿にするような発言をする岡田修平。

日菜子と結婚して、順風満帆な生活を送っている豊に対する嫉妬や僻みの感情からくる発言だった。

「そんなことはありませんよ。豊は優しいし、私のことを優先して大事にしてくれています。

岡田修平の言動に腹を立てながらも、日菜子は感情を抑えて冷静に答えている。

本心では、今すぐにでも席を立てて帰りたいほど、不快な気持ちになっていた。

「ふーん。俺の方が絶対に日菜子ちゃんのこと幸せにする自信あるんだけどな。不釣り合いだよ。豊と日菜子ちゃんは。」

岡田修平は、豊のことを言葉で否定し続ける。

まるで、日菜子の中にある豊の印象操作をするかのように。

「・・・私は豊と一緒に生活できるだけで十分幸せです。豊のことを悪く言わないでください。」

日菜子は、豊のことをフォローし続けた。

冷静に話しているつもりだが、夫である豊のことを馬鹿に岡田修平のことが許せなかった。

自然と、普段よりも口調が冷たくなっていく。

「豊が羨ましいよ。日菜子ちゃんみたいな美人と結婚できてさ。本当なら俺が日菜子ちゃんと結婚したかったよ。」

岡田修平は、日菜子の冷たい反応など気にすることなく、口説き続ける。

周りの従業員も心配そうに日菜子と岡田修平の会話を聞いていた。

「岡田さんなら、私なんかよりも可愛くてお似合いの女性がすぐに見つかりますよ。」

日菜子は、なんと返してわからず適当にお世辞を混ぜて話している。

しかし、この言葉は全てが嘘というわけではない。

岡田修平は、陰湿な性格を除けば、日菜子から見ても十分魅力的な外見をしている。

身長も高くスラっとしたモデルのような体系、そして整った美男子寄りの綺麗な顔。

能力も高く、若くしてエリアマネージャーまで出世した能力と優れた社会性。

陰湿で嫌味な性格でなければ、明らかに女性から好まれるタイプの人間だった。

外見や能力なら岡田修平は、明らかに豊よりも男性として格上の存在だった。

しかし、日菜子は岡田修平のことを認めていない。

いくら魅力的な男性だとしても、夫である豊のことを馬鹿にする岡田修平のことが日菜子は許せなかった。

しかし、岡田修平は、そんな日菜子のこと気持ちを逆なでするような発言ばかりしていく。

「俺は日菜子ちゃん以外の女性には興味ないから。早く豊と別れてよ。」

ふざけているようには思えない態度と口調で日菜子に言い切る岡田修平。

そんな岡田修平の言葉に、日菜子の心はなぜか一瞬だけドキっとして反応してしまった。

「酔いすぎですよ。それに、私は豊と別れる気なんてありません。」

日菜子は、呆れたように話している。

岡田修平の軽薄な言動や豊のことを馬鹿にする発言が日菜子は許せなかった。

その後も、一方的に岡田修平に話しかけられ続ける日菜子。

早くも2時間が経過し、予定していた時間を過ぎたことから会計を済ませ全員で店を出た。

「おい、この後2次会で別の店に行くぞ。豊と日菜子ちゃんも来いよ。」

岡田修平は、自分が気に入っている従業員数人と豊と日菜子を誘った。

この誘いは、絶対に断れないことは全員が知っている。

「・・・・・・・・」

無言で顔を見合わせる豊と日菜子。

お互い、何を考えているのか瞬時に理解するが、自分達に選択権がないことも同時に理解していた。

店長である豊は、直属の上司である岡田修平の誘いを断ることは絶対にできない。

今後の仕事にも関わってしまうことだけに、豊や日菜子は嫌々ながら2次会に参加することにした。

2次会の店は、岡田修平の行きつけのお洒落なバーだった。

店に入ると凛々しい感じのマスターが出迎えてくれた。

案内され、席に座ろうとすると、岡田修平は率先して日菜子の隣に座った。

日菜子の隣に座ろうとした豊を、無理やり押しのけ威嚇する岡田修平。

「悪いな。豊はそっちに座れ。日菜子ちゃんの隣は俺の指定席だからな。」

まるで、豊のことを挑発するような態度を取る岡田修平。

温厚で大人しい性格の豊でも、この岡田修平の態度と言動には冷静さを保っていられない。

口には出さなかったが、不快感に満ちた表情に変わる豊。

その様子を、日菜子や他の従業員は心配しながら見つめている。

2次会がスタートしても、岡田修平は一方的に日菜子に話しかけ続けていた。

すぐ近くに豊がいるにも関わらず、岡田修平は気にすることな日菜子を口説き続ける。

豊もなんとか2人の間に入ろうと試みるが、岡田修平は豊のことを完全に拒絶する姿勢を取り続けていた。

「すみません。ちょっとお手洗いに行ってきます。」

豊の前で岡田修平に口説かれ続けた日菜子は、気分が悪くなり席を外した。

逃げるように席を立ち、岡田修平から離れた。

そんな日菜子の態度に岡田修平は苛立っている。

日菜子が居なくなったことで、話相手がいなくなった岡田修平は、豊に絡みだした。

「おい豊。お前は店長として・・・・・・・・」

豊に対して説教っぽいことを捲し立てるように言い続ける岡田修平。

「・・はい。申し訳ありません。」

豊は、いつものように謝ることしかできない。

酒が入っているからなのか、岡田修平の勢いは止まらない。

周りの従業員も、岡田修平には何も言えずに無言で2人のことを見ていることしかできない。

そんな状況で、日菜子はトイレから戻ってきた。

「・・・・・・・・すいません。戻りました。」

すぐに状況を察した日菜子は、気まずそうにしている。

「ごめんね。日菜子ちゃんが相手してくれないから、豊に説教しちゃったよ。」

岡田修平は、日菜子が隣に座ると人が変わったように笑顔になった。

そして、説教をされて委縮している豊に見せつけるように日菜子と楽しそうに話し始める岡田修平。

豊は、苛立ちと敗北感から、立ち上がるとその場から離れた。

先ほどの日菜子のように、逃げるようにトイレに駆け込んだ。

「クソっ！なんだよあいつ。いつも偉そうにしゃがって。」

豊は、怒りに任せてトイレの壁を殴った。

独り言のように、ブツブツと岡田修平の愚痴を口にする豊。

瞬間的な怒りとストレスが原因なのか、豊はそのまま体調を崩してしまう。

動くことができず、そのままトイレから出ることができない豊。

「岡田さん・・・もう戻りましょう。みんな待ってますから。」

その頃、岡田修平は日菜子を店の外に無理やり連れ出していた。

人気のない店舗裏で、日菜子は岡田修平に口説かれている。

「まだ大丈夫だろ。豊だって戻ってこないしな。なあ、俺と付き合ってくれよ。日菜子ちゃんにマジで惚れてるんだよね。」

岡田修平は、先ほどとは違い、真面目な表情をしている。

「・・・そんなこと言われても困ります。私は豊と結婚してますので。」

日菜子は、いつもよりも積極的に自分のことを口説いてくる岡田修平のことを警戒している。

人目のつかない場所で、岡田修平と2人っきりでいる状況に危機感を感じていた。

「豊には内緒にしておけばいいだろ？あいつは鈍いから気づかないよ。俺と付き合えば、すぐに豊よりも俺の方がいいって気づくさ。」

岡田修平の自信は揺らぐことはない。

どんなに日菜子から、冷たい言動や拒絶するような態度を取られても、一切怯まない岡田修平。

自然と、自分の体を日菜子に近づかせていた。

逃げられないように、店舗の壁際に日菜子のことを追い込む岡田修平。

「・・・岡田さん。すいません。離れてください。」

身の危険を感じた日菜子は、怯えながらも、勇気を振り絞って岡田修平のことを睨みつけた。

強気の態度を見せるが、日菜子の両手と両足は、恐怖で震えていた。

「俺は本気なんだよ。日菜子ちゃんが豊と付き合う前から、ずっと狙ってた。」

日菜子に拒絶されても、岡田修平は一切引かない。

以前から、岡田修平が日菜子に対して好意を抱いていたことは嘘ではない。

日菜子自身も、岡田修平の気持ちには薄々ながら気付いていた。

自分のことを口説いているのは、半分冗談も含んでいると日菜子は認識している。

豊と結婚したことで、岡田修平は自分のことを諦めたと思っていた。

それが、勘違いであったことに、この時になり気づき日菜子は焦っている。

岡田修平は、日菜子のことを真っすぐ見つめながら、体を近づけていく。

「・・・離れてください。それ以上、近づかないで・・・」

日菜子は、逃げるように岡田修平から離れようとする。

下がり続けると、壁に背中がつき、それ以上後退することができない。

壁と岡田修平に挟まれる形で、身動きが取れなくなった日菜子。

体が硬直して動かすことができなくなっていた。

そんな日菜子に体が触れ合うような距離まで近づく岡田修平。

「日菜子ちゃん・・・好きだ。俺は本気だよ。」

岡田修平は、普段は見せないような表情を日菜子に見せている。

そして、日菜子の頬にそっと手を添えると、岡田修平は自分の顔を日菜子に近づけた。

「・・・・だめです。止めてください。」

岡田修平の吸い込まれるような瞳に見つめられる日菜子

目を離すことができず、逃げるできない。

「・・・豊から絶対奪ってやる。」

それだけ言うと、岡田修平は日菜子の柔らかい唇に自分の唇を重ねた。